

# 総合型選抜 二〇二二年度過去問題

## 日本語日本文学科 日本語日本文学コース

次の文章は夏目漱石「文鳥」の一部である。漱石は弟子の鈴木三重吉に勧められて、文鳥を飼うことにした。三重吉が文鳥を置いて帰ったところから最後までを引用した。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

やがて三重吉は鳥籠を丁寧に箱の中へ入れて、縁側へ持ち出して、此所へ置きますからといって帰った。自分は伽藍のような書斎の真中に床を展べて冷かに寝た。夢に文鳥を背負い込んだ心持は、少し寒かったが眠って見れば不断の夜のごとく穏かである。

翌朝眼が覚めると硝子戸に日が射している。忽ち文鳥に餌をやらなければならないと思った。けれども起きるのが退儀であった。今にやろう、今にやろうと考えているうちに、とうとう八時過になった。仕方がないから顔を洗うついでを以て、冷たい縁を素足で踏みながら、箱の蓋を取って鳥籠を明海へ出した。文鳥は眼をぱちつかせている。もつと早く起きたかっただろうと思ったら、気の毒になった。

文鳥の眼は真黒である。瞼の周囲に細い淡紅色の絹糸を縫いつけたような筋が入っている。眼をぱちつかせる度に絹糸が急に寄って一本になる。と思うとまた丸くなる。籠を箱から出すや否や、文鳥は白い首をちよつと傾けながらこの黒い眼を移して始めて自分の顔を見た。そうしてちちと鳴いた。

自分は静かに鳥籠を箱の上に据えた。文鳥はぱつと留り木を離れた。そうしてまた留り木に乗った。留り木は二本ある。黒味がかかった青軸を程よき距離に橋と渡して横に並べた。その一本を軽く踏まえた足を見るといかにも華奢に出来ている。細長い薄紅の端に真珠を削ったような爪がついて、手頃な留り木を甘く抱え込んでいる。すると、ひらりと眼先が動いた。文鳥は既に留り木の上で方向を換えていた。しきりに首を左右に傾ける。傾けかけた首をふと持ち直して、心持前へ伸したかと思ったら、白い羽根がまたちらりと動いた。文鳥の足は向うの留り木の真中あたりに具合よく落ちた。ちちと鳴く。そうして遠くから自分の顔を覗き込んだ。

自分は顔を洗いに風呂場へ行った。帰りに台所へ廻って、戸棚を明けて、昨夕三重吉の買って来てくれた粟の袋を出して、餌壺の中へ餌を入れて、もう一つには水を一杯入れて、また書斎の縁側へ出た。

三重吉は用意周到な男で、昨夕丁寧に餌をやる時の心得を説明して行った。その説によると、無暗に籠の戸を明けると文鳥が逃げ出してしまう。だから右の手で籠の戸を明けながら、左の手をその下へ宛てがって、外から出口を塞ぐようにしなくっては危険だ。餌壺を出す時も同じ心得でやらなければならぬ。とその手つきまでして見せたが、こう両方の手を使って、餌壺をどうして籠の中へ入れる事が出来るのか、つい聞いて置かなかった。

自分はやむをえず餌壺を持ったまま手の甲で籠の戸をそろりと上へ押し上げた。同時に左の手で開いた口をすぐ塞いだ。鳥はちよつと振り返った。そうして、ちちと鳴いた。自分は出口を塞いだ

左の手の処置に窮した。人の隙を窺って逃げるような鳥とも見えないので、何となく気の毒になった。三重吉は悪い事を教えた。

大きな手をそろそろ籠の中へ入れた。すると文鳥は急に羽搏はばたきを始めた。細く削った竹の目から暖いむく毛が、白く飛ぶほどに翼を鳴らした。自分は急に自分の大きな手が厭いやになった。粟の壺と水の壺を留り木の間に漸ようやく置くや否や、手を引き込みました。籠の戸ははたりと自然ひしりに落ちた。文鳥は留り木の上に戻った。白い首を半ば横に向けて、籠の外にいる自分を見上げた。それから曲げた首を真直にして足の下もとにある粟と水を眺めた。自分は食事をしに茶の間へ行った。

その頃は日課として小説を書いている時分であった。飯と飯の間は大抵机に向って筆を握っていた。静かな時は自分で紙の上を走るペンの音を聞く事が出来た。伽藍のような書齋へは誰も入って来ない習慣であった。筆の音に淋しさという意味を感じた朝も昼も晩もあつた。しかし時々はこの筆の音がぴたりとやむ、またやめねばならぬ、折も大分あつた。その時は指の股に筆を挟んだ儘まま手の平へ顎あごを載せて硝子越ガラスこしに吹き荒れた庭を眺めるのが癖であつた。それが済むと載せた顎を一応つま撮んで見る。それでも筆と紙が一所にならない時は、撮んだ顎を二本の指で伸して見る。すると縁側で文鳥が忽たちまちち千代々と二声鳴いた。

筆を擱おいて、そつと出て見ると、文鳥は自分の方を向いたまま、留り木の上から、のめりそうに白い胸を突き出して、高く千代といった。三重吉が聞いたらさぞ喜ぶだろうと思うほどな美しい声で千代といった。三重吉は今に馴なれると千代と鳴きますよ、きつと鳴きますよ、と受合つて帰って行った。

自分はまた籠の傍へしゃがんだ。文鳥は膨ふくらんだ首を二、三度縦横に向け直した。やがて一団ひとかたまりの白い体がぼいと留り木の上を抜け出した。と思うと奇麗な足の爪が半分ほど餌壺の縁ふちから後へ出た。小指を掛けてもすぐ引つ繰り返りそうな餌壺は釣鐘のように静かである。さすがに文鳥は軽いものだ。何だか淡雪の精のような気がした。

文鳥はつと嘴くちばしを餌壺の真中に落した。そうして二、三度左右に振つた。奇麗ならに平して入れてあつた粟がはらはらと籠の底に零こぼれた。文鳥は嘴を上げた。咽喉のどの所で微かすかな音がする。また嘴を粟の真中に落す。また微な音がする。その音が面白い。静かに聴いていると、丸くて細やかで、しかも非常に速かである。董すみれほどな小さい人が、黄金こがねの槌つちで瑪瑙めのうの基石でもつづけ様に敲たたいているような気がする。

嘴の色を見ると紫を薄く混ぜた紅のようである。その紅が次第に流れて、粟をつつく口尖くちさきの辺は白い。象牙を半透明にした白さである。この嘴が粟の中へ入る時は非常に早い。左右に振り蒔まく粟の珠たまも非常に軽そうだ。文鳥は身を逆さまにしないばかりに尖とがった嘴を黄色い粒の中に刺し込んで、膨ふくらんだ首を惜気もなく右左へ振る。籠の底に飛び散る粟の数は幾粒だか分らない。それでも餌壺だけは寂然せきぜんとして静かである。重いものである。餌壺の直径は一寸五分すんぶほどだと思つ。自分はそつと書齋へ帰つて淋しくペンを紙の上に走らしていた。縁側では文鳥がちちと鳴く。折々は千代々々とも鳴く。外では木枯が吹いていた。

夕方には文鳥が水を飲む所を見た。細い足を壺の縁かへ懸かけて、小い嘴に受けた一零ひとしずくを大事そうに、仰向あおむいて呑み下している。この分では一杯の水が十日位続くだろうと思つてまた書齋へ帰つた。晩には箱へしまつてやつた。寝る時硝子戸から外を覗いたら、月が出て、霜が降っていた。文鳥は箱の中でことりともしなかつた。

明る日もまた気の毒な事に遅く起きて、箱から籠を出してやったのは、やっぱり八時過ぎであった。箱の中ではとうから目が覚めていたんだろう。それでも文鳥は一向不平らしい顔もしなかった。籠が明るい所へ出るや否や、いきなり眼をしばたいて、心持首をすくめて、自分の顔を見た。

昔し美しい女を知っていた。この女が机に凭れて何か考えている所を、後から、そつと行つて、紫の帯上げの房になった先を、長く垂らして、頸筋の細いあたりを、上から撫で廻したら、女はもうのう気に後を向いた。その時女の眉は心持人の字に寄つていた。それで眼尻と口元には笑が萌していた。同時に恰好の好い頸を肩まですくめていた。文鳥が自分を見た時、自分はふとこの女の事を思い出した。この女は今嫁に行つた。自分が紫の帯上でいたずらをしたのは縁談の極つた二、三日後である。

餌壺にはまだ粟が八分通り入っている。しかし殻も大分混つていた。水入には粟の殻が一面に浮いて、苛く濁つていた。かえてやらなければならない。また大きな手を籠の中へ入れた。非常に要小心して入れたにもかかわらず、文鳥は白い翼を乱して騒いだ。小い羽根が一本抜けても、自分は文鳥に済まないと思つた。殻は奇麗に吹いた。吹かれた殻は木枯が何処かへ持つて行つた。水もかえてやつた。水道の水だから大変冷たい。

その日は一日淋しいペンの音を聞いて暮した。その間には折々千代々々という声も聞えた。文鳥も淋しいから鳴くのではなからうかと考えた。しかし縁側へ出て見ると、二本の留り木の間を、彼方へ飛んだり、此方へ飛んだり、絶間なく行きつ戻りつしている。少しも不平らしい様子はなかった。

夜は箱へ入れた。明る朝眼が覚めると、外は白い霜だ。文鳥も眼が覚めているだろうが、なかなか起きる気にならない。枕元にある新聞を手取るさえ難儀だ。それでも煙草は一本ふかした。この一本をふかしてしまつたら、起きて籠から出してやろうと思ひながら、口から出る煙の行方を見詰めていた。するとこの煙の中に、首をすくめた、眼を細くした、しかも心持眉を寄せた昔の女の顔がちよつと見えた。自分は床の上に起き直つた。寝巻の上へ羽織を引掛けて、すぐ縁側へ出た。そうして箱の蓋をはずして、文鳥を出した。文鳥は箱から出ながら、千代々々と二声鳴いた。

三重吉の説によると、馴れるに従つて、文鳥が人の顔を見て鳴くようになるんだそうだ。現に三重吉の飼つていた文鳥は、三重吉が傍にいさえすれば、しきりに千代々々と鳴きつづけたそうだ。のみならず三重吉の指の先から餌を食るといふ。自分もいつか指の先で餌をやつて見たいと思つた。次の朝はまた怠けた。昔の女の顔もつい思ひ出さなかつた。顔を洗つて、食事を済まして、始めて、気がついたように縁側へ出て見ると、いつの間にか籠が箱の上に乗っている。文鳥はもう留り木の上を面白そうにあちら、こちらと飛び移っている。そうして時々は首を伸して籠の外を下の方から覗いている。その様子がなかなか無邪気である。昔紫の帯上でいたずらをした女は襟の長い、背のすらりとした、ちよつと首を曲げて人を見る癖があつた。

粟はまだある。水もまだある。文鳥は満足している。自分は粟も水もかえずに書齋へ引つ込んだ。昼過ぎまた縁側へ出た。食後の運動かたがた、五、六間の廻り縁を、あるきながら書見するつもりであつた。ところが出て見ると粟がもう七分がた尽きている。水も全く濁つてしまつた。書物を縁側へ抛り出して置いて、急いで餌と水をかえてやつた。

次の日もまた遅く起きた。しかも顔を洗つて飯を食うまでは縁側を覗かなかつた。書齋に帰つてから、あるいは昨日のように、家人が籠を出して置きはせぬかと、ちよつと縁へ顔だけ出して見たら、果して出してあつた。その上餌も水も新しくなつていた。自分はやつと安心して首を書齋に入

れた。途端に文鳥は千代々と鳴いた。それで引込めた首をまた出して見た。けれども文鳥は再び鳴かなかつた。げげんな顔をして硝子越に庭の霜を眺めていた。自分はとうとう机の前に帰つた。

書斎の中では相変わらずペンの音がさらさらする。書きかけた小説は半分はかどつた。指の先が冷たい。今朝埋けた佐倉炭は白くなつて、薩摩五徳に懸けた鉄瓶が殆ど冷めてゐる。炭取は空だ。手を敲いたがちよつと台所まで聴えない。立つて戸を明けると、文鳥は例に似ず留り木の上じつと留つてゐる。よく見ると足が一本しかない。自分は炭取を縁に置いて、上からごこんで籠の中を覗き込んだ。いくら見ても足は一本しかない。文鳥はこの華奢な一本の細い足に総身を託して黙然として、籠の中に片づいてゐる。

自分は不思議に思つた。文鳥について万事を説明した三重吉もこの事だけは抜いたと見える。自分が炭取に炭を入れて帰つた時、文鳥の足はまだ一本であつた。しばらく寒い縁側に立つて眺めていたが、文鳥は動く気色もない。音を立てないで見詰めてみると、文鳥は丸い眼を次第に細くし出した。大方眠たいのだらうと思つて、そつと書斎へ入ろうとして、一步足を動かすや否や、文鳥はまた眼を開いた。同時に真白な胸の中から細い足を一本出した。自分は戸を閉てて火鉢へ炭をついだ。

小説は次第に忙しくなる。朝は依然として寝坊をする。一度家のものが文鳥の世話をしてくれてから、何だか自分の責任が軽くなつたような心持がする。家のものが忘れる時は、自分が餌をやる水をやる。籠の出し入れをする。しない時は、家のものを呼んでさせる事もある。自分はただ文鳥の声を聞くだけが役目のようになった。

それでも縁側へ出る時は、必ず籠の前へ立留つて文鳥の様子を見た。大抵は狭い籠を苦にもしないで、二本の留り木を満足そうに往復してゐた。天氣の好い時は薄い日を硝子越に浴びて、しきりに鳴き立ててゐた。しかし三重吉のいつたように、自分の顔を見てことさらに鳴く気色は更になかつた。

自分の指からじかに餌を食う杯という事は無論なかつた。折々機嫌のいい時は麵麴の粉などを人差指の先へつけて竹の間からちよつと出して見る事があるが文鳥は決して近づかない。少し無遠慮に突き込んで見ると、文鳥は指の太いのに驚いて白い翼を乱して籠の中を騒ぎ廻るのみであつた。二、三度試みた後、自分は気の毒になつて、この芸だけは永久に断念してしまつた。今の世にこんな事の出来るものがいるかどうだか甚だ疑わしい。恐らく古代の聖徒の仕事だらう。三重吉は嘘を吐いたに違ない。

或日の事、書斎で例のごとくペンの音を立てて佗びしい事を書き連ねていると、ふと妙な音が耳に入った。縁側でさらさら、さらさらいう。女が長い衣の裾を捌いてゐるようにも受取られるが、ただの女のそれとしては、余りに仰山である。雛段をあるく、内裏雛の袴の襷の擦れる音でも形容したらよかろうと思つた。自分は書きかけた小説を余所にして、ペンを持ったまま縁側へ出て見た。すると文鳥が行水を使つてゐた。

水は丁度かえ立てであつた。文鳥は軽い足を水入の真中に胸毛まで浸して、時々は白い翼を左右にひろげながら、心持水入の中にしゃがむように腹を押しつけつつ、総身の毛を一度に振つてゐる。そうして水入の縁にひよいと飛び上る。しばらくしてまた飛び込む。水入の直径は一吋五分位に過ぎない。飛び込んだ時は尾も余り、頭も余り、背は無論余る。水に浸かるのは足と胸だけである。それでも文鳥は欣然として行水を使つてゐる。

自分は急に易籠を取つて来た。そうして文鳥をこの方へ移した。それから如露を持つて風呂場へ行って、水道の水を汲んで、籠の上からさあさあと掛けてやつた。如露の水が尽る頃には白い羽

根から落ちる水が珠たまになつて転がった。文鳥は絶えず眼をぱちぱちさせていた。

昔紫の帯上でいたずらをした女が、座敷で仕事をしていた時、裏二階から懐中鏡で女の顔へ春の光線を反射させて楽しんだ事がある。女は薄紅くなった頬を上げて、緋ほそい手を額の前に翳かざしながら、不思議そうに瞬まばたきをした。この女とこの文鳥とは恐らく同じ心持だろう。

日数ひかずが立つに従つて文鳥は善よく轉さえずる。しかし能よく忘れられる。或る時は餌壺が粟の殻だけになつていた事がある。ある時は籠の底が糞で一杯になつていた事がある。ある晩宴会があつて遅く帰つたら、冬の月が硝子越に差し込んで、広い縁側がほの明るく見えるなかに、鳥籠がしんとして、箱の上に乗っていた。その隅に文鳥の体が薄白く浮いたまま留り木の上に、有るか無きかに思われた。自分は\*1外套がいとうの羽根を返して、すぐ鳥籠を箱のなかへ入れてやった。

翌日文鳥は例のごとく元氣よく轉さえずっていた。それから時々寒い夜も箱にしまつてやるのを忘れることがあつた。ある晚いつもの通り書齋で専念にペンの音を聞いていると、突然縁側の方でがたりと物の覆くがえつた音がした。しかし自分は立たなかつた。依然として急ぐ小説を書いていた。わざわざ立って行つて、何でもないと忌々いまいましいから、気にかからぬではなかつたが、やはりちよつと聞耳を立てたまま知らぬ顔で済ましていた。その晩寝たのは十二時過ぎであつた。便所に行つたついで、気掛りだから、念のため一応縁側へ廻つて見ると――

籠は箱の上から落ちてゐる。そうして横に倒れてゐる。水入も餌壺も引繰ひくくり返つてゐる。粟は一面に縁側に散らばつてゐる。留り木は抜け出している。文鳥はしのびやかに鳥籠の棧さんにかじりついてゐた。自分は明日から誓つてこの縁側に猫を入れまいと決心した。

翌日文鳥は鳴かなかつた。粟を山盛入れてやった。水を漲みなぎるほど入れてやった。文鳥は一本足のまま長らく留り木の上を動かかなかつた。午飯ひるめしを食つてから、三重吉に手紙を書こうと思つて、二三行書き出すと、文鳥がちちと鳴いた。自分は手紙の筆を留めた。文鳥がまたちちと鳴いた。出て見たら粟も水も大分減つてゐる。手紙はそれぎりにして裂いて捨てた。

翌日文鳥がまた鳴かなくなつた。留り木を下りて籠の底へ腹を圧しつけてゐた。胸の所が少し膨ふくらんで、小さい毛が漣さざなみのように乱れて見えた。自分はこの朝、三重吉から例の件で某所まで来てくれという手紙を受取つた。十時までにという依頼であるから、文鳥をそのままにして置いて出た。三重吉に逢つて見ると、例の件が色々長くなって、一所に午飯を食う。一所に晩飯を食う。その上明日の会合まで約束して宅へ帰つた。帰つたのは夜の九時頃である。文鳥の事は悉皆すつかり忘れていた。疲れたから、すぐ床へ入つて寝てしまつた。

翌日眼が覚めるや否や、すぐ例の件を思い出した。いくら当人が承知だつて、そんな所へ嫁にやるのは行末よくあるまい、まだ子供だから何処へでも行けといわれる所へ行く気になるんだろう。一旦行けば無暗に出られるものじゃない。世の中には満足しながら不幸に陥つて行く者が沢山ある。などと考へて楊枝ようじを使つて、朝飯を済ましてまた例の件を片づけに出掛けて行つた。

帰つたのは午後三時頃である。玄関へ外套を懸けて廊下伝いに書齋へ入るつもりで例の縁側へ出て見ると、鳥籠が箱の上に出してあつた。けれども文鳥は籠の底に反そつ繰り返つてゐた。二本の足を硬く揃えて、胴と直線に伸ばしてゐた。自分は籠の傍に立つて、じつと文鳥を見守つた。黒い眼を眠つてゐる。臉の色は薄蒼く変つた。

餌壺には粟の殻ばかり溜つてゐる。啄つばむべきは一粒もない。水入は底の光るほど涸かれている。西へ廻つた日が硝子戸を洩れて斜めに籠に落ちかかる。台に塗つた漆うるしは、三重吉のいつたごとく、いつの間にか黒味が脱ぬけて、朱の色が出て来た。

自分は冬の日に色づいた朱の台を眺めた。空になった餌壺を眺めた。空しく橋を渡している二本の留り木を眺めた。そうしてその下に横よこたわる硬い文鳥を眺めた。

自分はごこんで両手に鳥籠を抱えた。そうして、書斎へ持って入った。十畳の真中へ鳥籠を卸おろして、その前へかしまつて、籠の戸を開いて、大きな手を入れて、文鳥を握って見た。柔かい羽根は冷切ひやひやっている。

拳こぶしを籠から引き出して、握った手を開けると、文鳥は静に掌の上にある。自分は手を開けたまま、しばらく死んだ鳥を見詰めていた。それから、そつと座布団の上に卸した。そうして、烈しく手を鳴らした。十六になる小女こおんなが、はいといつて敷居際に手をつかえる。自分はいきなり布団の上にある文鳥を握って、小女の前へ抛ほうり出した。小女は俯うつむ向いて畳を眺めたまま黙っている。自分は、餌をやら

ないから、とうとう死んでしまったといいながら、下女の顔を睥にらめつけた。下女はそれでも黙っている。自分は机の方へ向き直った。そうして三重吉へ端書はがきを書いた。「家人が餌をやらないものだから、文鳥はどうとう死んでしまった。たのみもせぬものを籠へ入れて、しかも餌をやる義務さえ尽さないのは残酷の至りだ」という文句であった。

自分は、これを投函だして来い、そうしてその鳥をそつちへ持って行けと下女にいった。下女は、どこへ持って参りますかと聞き返した。どこへでも勝手に持って行けと怒鳴りつけたら、驚いて台所の方へ持って行つた。

しばらくすると裏庭で、子供が文鳥を埋うめるんだ埋るんだと騒いでいる。庭掃除に頼んだ植木屋が、御嬢ごじやうさん、此処こゝいらが好いでしようといっている。自分は進まぬながら、書斎でペンを動かしていた。

翌日は何だか頭が重いので、十時頃になって漸ようやく起きた。顔を洗いながら裏庭を見ると、昨日植木屋の声のしたあたりに、小さい\*2公札こうさつが蒼あざい、木賊\*3の一株と並んで立っている。高さは木賊よりもずっと低い。庭下駄を穿はいて、日影の霜を踏み砕いて、近づいて見ると、公札の表には、この土手登るべからずとあった。\*4筆子の手蹟しゅせきである。

午後三重吉から返事が来た。文鳥は可愛想な事を致しましたとあるばかりで家人が悪いとも残酷だとも一向書いてなかった。

(出典 夏目漱石「文鳥」)

- \*1 (外套の) 羽根 外套の袖の部分。(鳥の羽根に形状が似ているところから。)
- \*2 公札 高札。人目を引くところにかかげた板の札。
- \*3 木賊 多年生常緑シダ類。高さは約五〇センチメートルほど。
- \*4 筆子 漱石の長女。

問一 文中の「自分」にとって、文鳥はどのようなものか。読み取れることを二〇〇字以内で述べなさい(字数には句読点を含む)。

問二 傍線について、三重吉の返事を受取った時の「自分」の思いは、どのように想像されるか、二〇〇字以内で自分の意見を自由に述べなさい(字数には句読点を含む)。

問三 この作品を通じて作者は何を表現しようとしたと思うか。四〇〇字以内で自分の意見を自由に述べなさい(字数には句読点を含む)。